日本農業新聞　2018年(平成30年)10月31日(水曜日)

きょう歩き

農的社会デザイン研究所代表
蔦谷栄一氏

クロマツによる海岸林再生

受け継がれる「協同」

3・11による大津波で失われてしまった海岸林の再生に取り組んでいる仙台近郊の現場に足を運んだ。「ゆりりん愛護会」代表の大橋信彦さんにご案内いただいたが、大橋さんから先立ってお送りいただいたのが小山晴子著『津波から七年目―海岸林は今』なる本である。

海岸林の再生については、植物生態学者・宮脇昭氏が唱える「潜在自然植生」という、本来そこに生えていた木を植林しての「いのちを守る森の防潮堤」なる取り組みが注目されている。宮脇方式として、タブノキ、スジダイなどの常緑広葉樹を基本とし、クロマツは人間の手によって植えられた人工林であり、〝ヨソモノ〟と位置付けられている。

本書は宮脇方式を尊重しながらも、著者が長年東北の海岸を歩いての観察結果を踏まえて、タブノキなどは乾燥して風が強い仙台湾の海岸にはなじまない。むしろクロマツが自然植生として存在していたとともに、これを仙台平野に暮らす人たちは大切にし、また植え育ててもきた、と主張する。

本書の中で目を引かれた一つが「海岸林保護組合」である。昭和になって全国的な救済事業として防潮林の造成事業が行われた際に、海岸林保護組合が集落ごとに作られ、宮城県ではその連合会まで作られたという。

これには前史があり、仙台藩は、海岸部に新田を切り開くに当たって、常習的な潮害への対策として、17世紀半ばからクロマツの植林に取り組んできた。ここでは「数名のリーダー的存在が統率するのではなく、住民が対等に寄り合い、一致点を見いだして集落を運営する伝統があり、村民が協力して松林を管理する伝統も受け継がれてきた」という。こうした協同・自治の伝統があってこそ、海岸林保護組合は機能してきたといえる。

大橋さんたちもクロマツによる海岸林再生の前に「環境学習林創造モデル事業」に取り組んできた。地域の小・中学生も巻き込み、海岸林を清掃し、また学びながらクロマツや自生植物を守ってきた。地域・市民、特に子どもたちが体験を通じ、その大切さを学んでもらうことによって、次の世代へバトンを引き継いでいくことも狙いとする。

クロマツの海岸林は協同・自治の象徴でもある。

（次回は11月7日付）